

『葦牙 Journal』へ掲載したエッセイ

2000 年～ 2007 年

石塚秀雄

巻頭言・ライトの俳句

☆ 私事で恐縮だが、『葦牙』と縁ができたのは、十五年ほど前に友人からの購読の薦めがあって、読者となり、アメリカの黒人作家リチャード・ライトについての投稿エッセイを載せてもらったのがきっかけである。

最近、佐伯彰一氏が、ある小冊子で、ライトの俳句の本を紹介されていたので、私もアメリカの書店を通じて早速入手した。田舎暮らしにはインターネットは便利である。ライトは一九六〇年十一月に心理的亡命の地フランスで死んだが、晩年の病と窮乏に悩まされた一年半あまりで、俳句を約四千句作った。たまたま友人から、俳句を教わったのがきっかけのようだが、平均一日八句のペースである。いつもノートを離さず、小さな娘さんにも十七シラブルで算数のようだよと教えたそうだが、日本人の俳人でもこのように集中して作句はなかなかできないだろう。

ライトは自分の文学的探求と訓練として俳句を作ったようだ。金にもならぬのに必死になってアメリカ黒人としての自然観、自然の受けとめ方に、白人文化とは違ったものを見い出そうとした。ライトは八百十六句に自選したが、生前には本にはならなかった。サンドバークやパウンドなどの詩が好きだったライトの俳句は英詩としての韻も強弱もよくできているような気がするのだが。最初の句と拙訳は以下のとおり。

I am nobody:/ A red sinking autumn sun/ Took my name away.

名も無くて秋の入日とともにあり

最後の句はこうである。

On a scaly oak,/ In the glare of sunset rays,/ Ice on eagle's wings.

寒鷹を櫟の木に置く夕日かな

ライトが文章表現に非常な努力をしていたことは、彼の文体から想像できる。作句が文章鍛錬と病気の回復の一助に使われていたことは、わが日本文学としては悦ばしいことであるが、家元制度的な師系などというものが幅を利かせている我が国の俳壇を振り返ると、ライトの文学的健気さに熱い思いがこみあげてくるのである。(石塚秀雄)

[[『葦牙 Journal』 No.29、発行：『葦牙』 同人会、編集：吉田悦郎、大宮市上小町 3 7 4－6、2000 年 8 月 20 日発行]

巻頭言・ブッシュの夢

米国の新しい戦争

九月十一日の朝、アメリカは劇的なテロに襲われた。ワシントンにあるペンタゴンのビルとニューヨークの世界貿易センターのツインビルに大型ジェット旅客機が突っ込んだのである。五千人以上の無辜の人々が犠牲となった。ブッシュ米大統領は、この攻撃はテロリズムを越えたものであり、アメリカは未経験の新しい戦争に突入すると宣言した。アメリカは、アフガニスタンおよび他の国への報復戦争を準備している。この文章が読まれる時点ではすでにアフガニスタンなどにおける戦争は開始されているかもしれない。七一パーセントの米国民がたとえ市民の犠牲がでても、敵国を攻撃すべきだとしている。「復讐 vengeance」の気持ちは、アメリカ人の根深い感情の一つなのであろうか。日本政府は火事場泥棒のように、軍事協力の名目で一挙に軍事化の既成事実化を目指している。文明社会、国際社会とは何を指すのか？ この攻撃がアメリカの軍事力と経済力のシンボルである二つのビル、さらにはホワイトハウスもおそらくその標的になっていたようだから、政治力のシンボルをも標的にしたことは間違いない。アメリカは面子を失った。多くのアメリカ人が、「古いアメリカ」が失われたという喪失感に捕らわれているという。驕れる巨人のシンボルが打ち壊されたのである。テロリズムは中心になるものを狙うということからすれば、他の諸国とりわけ、日本が、同種のテロリズムの標的になることはあり得ない。国内テロはわからないが。いわゆる費用対効果が悪すぎるからである。日本人にテロにたいする危機意識がないと言う人もいるが危険がないのだから当然である。

テレビでアメリカの政治学者は、テロリズムは蚊のようなもので、蚊の発生する沼、すなわち貧困をなくさなければ根絶できないと述べている。蚊が象に大きな痛手を与えた。ブッシュの言うテロリズムの絶滅、その支援国家の絶滅とは、どのようなことを意味するのであろうか。あきらかにブッシュは世界の貧困の絶滅を目的としているのではなく、ステロタイプ化されたテロリストおよびテロリスト国家と呼ぶものを絶滅しようと考えているのである。ということは、彼の言う国際テロリズムの原因の中に貧困は含まれていないということであろう。今回のテロリズムをどう定義するかは人によってまちまちである。そもそも気になるのは、ブッシュが今回のテロリズムを「文明社会への挑戦」と述べていることである。Civilized Society, Civilized Westなどの言葉を使っている。欧米人はこれをユダヤ・キリスト教世界という意味で普通使っている。日本の新聞などが今回の事件を「文明社会」への挑戦などという見出しで報じているが、いったい「文明社会」を何だと考えているのだろうか？ 先進キリスト教世界の人口は約八億人である。日本を先進国の仲間に入れたにしても一〇億人弱である。世界人口は約六〇億人であるから、一六パーセントを占める。この人たちに対する挑戦だと考えているのであろうか。「自由社会」という言葉も使っているので、たぶんこれらの資本主義国の人々をさすのであろう。残りの約八割の世界人口は野蛮社会とでもいうのだろうか？ テロの動

機 犯罪者追求には動機の立証が不可欠と言われている。殺すつもりがあったとないでは判決に大きな違いがある。今回のテロの動機はなにか？ 政治的、宗教文化的、経済的なあれこれの動機があるとすればどのように説明するのか？ それとも単なる殺人狂か？ DNA異常の病人という説明もあるだろう。いずれにせよ、テロの動機に係わる説明にあまり関心がないのが気になる。

有力な論評は「パレスチナなどのイスラムへの迫害に対して米国がイスラエル寄りであること。アメリカの一国一人勝ちのグローバル化に対する反対」などということである。こうした議論にたいして、犠牲者を冒涇するとしてうち消す者がいるが、なぜであろうか？ 一人勝ちグローバル化は続くか。

事件のおきる一週間前のアメリカの雑誌『タイムズ』は、初の黒人大統領になる可能性もあった国務長官のパウエルが、ブッシュ政権ではすっかりのけ者にされて、ブラックをもじってブランク（空虚な）国務長官と呼ばれており、辞任は時間の問題と報じていた。ブッシュは、自分と同じ強硬路線の考えを持っているお気に入りのソ連専門家である黒人女性のコンディ・ライス補佐官を重用して、パウエルを差し置いて外交交渉させてきた。たとえば、パウエルが京都議定書離脱のときに代案を用意するとした発言を、そんなものは用意しないと後でライスがうち消している。ブッシュグループはいわゆる「一方的主義者」(unilateralist)であり、アメリカ第一主義である。パウエルは双務主義(bilateral)である。今回の事件におけるパウエルの発言のニュアンスでブッシュたちと多少ずれがあるのはそのためである。しかし、ブッシュの米国一人勝ち主義の鼻はへし折られて、各国との協調を求めざるを得なくなっているようにみえる。ブッシュ自体が自分の本来の性格である自己チュー的な「新しい戦争」宣言による仕返し西部劇的な暴力の夢と、各国との協調の間を揺れ動いているように見えるが、しかし、戦争を開始すれば、世界のアメリカ化がその目標になるだろう。ブッシュは、アメリカ議会での演説で、彼の新しい戦争を、融和しない二つのものの戦いだと述べている。正義と悪、文明と野蛮、自由と専制あるいは全体主義と並べて、「神はこの戦いで中立ではない」と述べると、議場は総立ちになり拍手をした。

九月二四日付けの『ニューズウィーク』である論者(F.Zakaria)は次のように述べている。「世界は、米国がよろめいたら、やっていけないことを知っている。各国が個人の自由、自由企業、自由貿易、宗教の自由、民主主義を信じているならば、それはアメリカの秩序による果実を食べているのである。これらはみんなで守ってこそ確保できるものである。この戦いはあなたの戦いでもある」。こうした驕った発想をなかなか切り替えられないようだ。終わりなき正義とは、アメリカは自分の世界観とシステムを押しつけようとしている。したがって、これはアメリカが言うようにアメリカの仇討ちの戦争であって、他の国の戦争ではない。アメリカはなぜ狙われたのかを考えるべきである。テロリズムは抑圧的システムへの攻撃である。言いたければ、圧倒的な暴力の非対称性に対する攻撃でもある。彼が終わりなき正義(Infinite Justice)と戦争作戦を名付けたのも、自己中心性の現れである。それに対して、報復として市民を殺すのはいけないというアメリカ市民の主張があることは健全性の現れである。

正義の基準は普遍的でなければならない、気の毒な六千人に上る自国の死者を悼むならば、アフリカの数十万人に上る飢餓や戦乱における死者を悼むのも同じでなければならない。しかし、実際には、人の想像力は自分の生活世界を越えることはなかなか難しい。だから米国市民に感

情移入ができて、アフリカ人にはしづらい。なぜ人を殺してはいけないのかという子供の問いに答えられない大人が増えた日本では、米国のしようとしている戦争をどのように正当化するのか？ 自分に正義があって、相手に悪があるという単純な発想は、中世に戻ったかのようである。

また日本ならば、このような重大な事件を発生せしめた政府の責任が当然追及されるであろう。今後アメリカ政府は、国家の安全と国民の安全に多大な費用をかけなければならない。従来の市場的価値優先論理では済まない側面である。新しいシステムをどのように構築するかに米国の知恵が試されるだろう。したがって、長期の戦争という発想ではまずいだろう。テロリズムに戦争は仕掛けられない。結局はいくら一方的であるにしても明確な国家間の戦争になる。

米国はいわゆるイスラム原理主義派とそれらの国を滅亡させることができるだろうか？ ブッシュの夢は、世界を分割化して、さらなる自己の帝國的支配を拡張して、「穏健」イスラムなどをはじめとして第三世界を居留地のように囲い込み、新たなアメリカ支配の「戦後体制」をつくることだろうか？ 現代の普遍的な原則は民主主義であろう。それも正義論のJ・ローズが言う「品位のある民主主義」であろう。米国が世界の富を集中して、国内では他民族共存の民主主義を実行しているとしても、多くの他国に対して民主的に振る舞わず、正義を行使しなかったことが、テロの対象となった理由のひとつであろう。真の正義の実行こそが、今回の悲劇の再発を防ぐことになるだろう。

『葦牙 Journal』 No.36、発行：『葦牙』 同人会、編集：吉田悦郎、さいたま市上小町 374-4-6、2001 年 10 月 30 日発行]

巻頭言・世紀末的世紀始め

一九九五年にイギリスに行ったとき、すでに英国人たちは牛肉を食べていなかった。狂牛病の不安のためである。説明によれば、サッチャリズムによる民営化が政府の食肉安全保障に対する不信につながったということであった。去年、イギリスの新聞で見たが、刑務所の民営化により受刑者の自殺が増大しているという。刑務所の営利的効率的運営によって、囚人の待遇が改悪された結果だという。刑務所は極端な事例だと思うかもしれないが、これを病院、施設、会社などと拡大して考えていくと、それほど、本質的な違いはなさそうである。エンゲルスは「社会的殺人」と言ったと思うが、今、人間の安全保障という言葉が使われ始めている。

私的領域と公的領域を明白に区別化することによって、いわゆる近代の国家と社会は成立することになった。近代国家は夜警国家、国家独占資本主義、福祉国家などの形態変遷を取りつつ、小さい政府を目指して政治的・経済的役割の縮小化を目指すかのように見えたが、九月のアメリカにおけるイスラム特攻隊事件は、改めて国家の役割を復活させたかのようである。

国家の軍事的役割重視と自由市場経済主義の癒着は現代的視点から見るとダブルスタンダードにも見えるものの、国家と市場の初期の関係から言うと本来的役割分担と言うこともできる。すなわち新自由主義の台頭である。かつて近代国家が経済的役割に参入してその不可分の要素となり、さらには社会保障すなわち英語でいえば社会的安全を提供する役割も担うようになって

た。

しかし、公共性を次第に放棄するようになった国家は、人々の生活の安全に対する責任意識が希薄になりつつあるのは、我が国の現状から明白である。このような国家と自由市場と連結する原理は、公共性ではなくて、一部の社会的特権階層のイニシャチブである。では人間の安全保障は誰がするのか。国家、階級、営利組織、非営利組織、家族、個人の役割を改めて検討する必要がある。なにしろ国家もお払い箱寸前で再び陽の目を見そうな時勢なのだから。（石塚秀雄）

『葦牙 Journal』 No.37、発行：『葦牙』 同人会、編集：吉田悦郎、さいたま市上小町 374-6、2001 年 12 月 20 日]

巻頭言・ソウルで見た

☆ソウルで見たこと

在日朝鮮人文学と呼ばれたものは、今ではその状況も定義も変化しているようだ。現在いわゆる在日系の若い作家達の本もよく読まれ、映画にもなっているらしいが、私は最近の作家についてはあまり読んでおらず、読んだのは金史良、金達寿、金石範、金時鐘、金鶴泳、李恢成あたりまでである。つまり在日二世世代までだ。日本の作家では小林勝などがいた。

昨年十月にソウルに行った。成田から二時間弱で仁川新国際空港に着く。市内には全くといって良いほど英語や漢字が見あたらずハングルばかりである。したがって店の名前も、交通標識も何もかも判読できないのである。道行く人々は日本人と似ているので、町並みを解読できないことに一種のイライラを感じた。店の名前などを読みとることができる北京にくらべて、韓国の一徹な言語ナショナリズムを感じた。かたや日本は英語を第二公用語にしようという話もある。

ソウルの中心部を流れる漢江は、地図で見るとパリのセーヌ川のようなものである。地下鉄の駅の様子もちょっとパリの郊外の駅に似ている。地下鉄車内での物売りがいることもパリに似ている。靴磨きのスポンジを売る男は高らかな口舌と実演を行う。紳士の足下にかがんで、靴を磨いて光らせる。ひと車両の端まで行き再び戻って巡回すると、別の身なりの良い中年女性が一つ買い上げてハンドバックにしまった。また車椅子の青年が隣の車両から移ってきた。驚いたことに青年はロッテのガムを売り始めた。私のいた車両では買う人はいなかった。日本ではこうした光景は見られない。

スペインでは街頭で盲人が宝籤の立ち売りをしている。スペイン盲人協会は、巨大な社会的経済組織として存在している。韓国は福祉が遅れていると言われているが、こうした現象を、人間や社会のあり方としてはどのように評価すべきなのか。若者には日本ではない活気が見られた。町の店は間口の狭い零細商店が多く見られた。

ソウルでのささやかな見聞で、在日朝鮮人文学における、異質なものの同士の衝突による確執という側面に改めて気付かされた。改めて若い在日の作家の本を読んでみる気になった。（石

塚秀雄)

〔『葦牙 Journal』 No.38、発行：『葦牙』 同人会、編集：吉田悦郎、さいたま市上小町 374-6、2002 年 02 月 25 日〕

巻頭言・声に出る日本語

個人と国家

声に出して読む日本語の本というのが、売れているらしい。それも日本的イデオロギーとリンクしているらしいが。たしかに、いまの若い人は大声を出すことが少なくなっているようだ。たとえば、教室の大学生にもっと大きな声で読んでくださいと言っても大きな声がでない。再度言ってもやはり出ないのがほとんどである。「君ら大声を出したことないの？」と聞くと、あまりないという答えが返ってくる。

くだんの声を出して読む日本語という類の本は、郷愁を感じている中高年層が購読者ではないだろうか。相変わらず、若い人は声に出して読む必要性は感じていないのではないだろうか。学生にレポートを読ませると、自分で書いたレポートの漢字が読めないで詰まってしまうことが再三再四ある。たぶん、引き写しで書いているためであろうが、声に出す習慣がないので、平気なのであろう。元来、声高とか大声とかはあまり良い意味で使われない。反対に静かが良いものが多い。静けさが俳句などの対象になっている。沈黙は美（あるいは金）なりと言われるのはやはり日本文化であろう。アメリカ留学帰りなどがやたら早口でやかましく饒舌なのは、やはりアメリカナイズされたからであろう。どうも、しゃべることが存在証明の節がある。日本人が英会話を不得意とするのは、英語ができないためではなくて、会話をしないからである。これは文化的な構えの問題で、善し悪しの問題ではないと思う。

日本語でまともに会話ができない人には英会話は所詮無理だという自明のことがよく分かっていないらしいのが不思議である。したがって、読む日本語というフレーズそのものがやはり日本的であって、声に出る日本語には至らないのである。

その声で思うのは、最近の若い女性の声質である。テレビのニュースや天気予報に出てくる若い女性の声質が、こもったような無機質な感じがする。一種書き割りを読んでいるような人工的な感じがするのはなぜであろうか。なるほどこれも時代の声質であろう。

戦前の映画、戦後すぐの映画を見ても、やはり若い女性の声質と口調はそれぞれの時代のものである。田中絹代、浅丘ルリ子、栗原小巻、そして今の若い女優と、それぞれの時代の声調は違うと思う。そして今の若い女性たちに流行しているらしい声質に私としては不快感を感じるのは、彼女たちのその声質から、人とのコミュニケーションを拒絶した自己防御的な雰囲気を感じ取れるからである。もっとも私自身も「自分の声調」ではなく、ある種「時代の声調」を発話しているにすぎないかもしれない。（石塚秀雄）

〔『葦牙 Journal』 No.44、【編集】『葦牙』 同人会：牧 梶郎、東京都新宿区百人町 2-18-6-401 【発行】いりす、東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3-3-201 2003 年 02 月 20 日〕

巻頭言・曖昧主義の蔓延

曖昧主義の蔓延 イラクで日本の外交官二名が殺害された。それを大きく報道する新聞の紙面の隅には、コロンビアでゲリラに二年あまり誘拐されていた日本人商社マンの遺骸が帰国したという記事が小さく載っていた。世間の関心の重点は新聞の紙面の面積に比例するのであろう。人の死に軽重はない筈であるが。昔、上野動物園のパンダの死亡記事は大きく掲載され、落語家の三遊亭円生の死はその下に小さく載っていたことを思い出す。

人は感情移入できるものに対しては大きく感応するのであろう。死んだ外交官の親戚が「その死を誇りに思う」とテレビで語っていたが、まるで、戦前の「名誉の戦死を遂げた兵隊」の遺族の発言と同質ではないか。新聞の取り上げ方も、死んだ外交官たちを「外交官美談」で盛り上げている。新聞が世論をことさらセンセーショナルな方向に煽るのは、まさに戦前、戦中の新聞のやってきたことと同じではないか。

社説や識者の論壇などでも低劣で目に余るものも最近目立つ。新聞のオブスカランティズム（曖昧主義・二股主義）は、ますますひどくなってきているようだ。しかし、それは日本社会の反映にしかすぎないことも確かである。外国の新聞を読むと、自民党をつぶすという小泉首相をどのようなロジックで国民の多くが支持するのかが理解できなくて困惑を示した記事がいくつかあった。

今の首相や外相などの発言は、曖昧主義の最たるもので、なにも実質的なものがなく、まともなロジックがない。こうした発言形態に国民の多くが痛痒を感じないとすれば、国民のオブスカランティズムも相当重症である。日本人はロジックを軽視する風習があると外国紙が考えるのも当然だ。憲法に対する評価や姿勢にも同じ症状が現れている。護憲と改憲といういずれの立場も第九条にしか注目していない。条文の曖昧さをなくすのだったら、いっそ、最近のプレゼンテーション方式のように、項目箇条書きにすれば、ご都合主義的な解釈による揺れは少なくなるだろう。私は昔から原理的「改憲論者」であり、憲法の中で「民主主義」という言葉を使うこと、第一条の国民主権を優先的に明示すること、第二五条など国民の社会権・経済権利の充実拡充などがとくに必要だと考えている。戦後六〇年近くのパラダイム転換の時期に日本はさしかかっている。(石塚秀雄)

巻頭言・わが「団塊の世代」の罪

団塊とはマッスすなわち、「大衆」という意味と同じである。「マッセズ」とはその昔アメリカの左翼文芸雑誌の名前であったが。戦後ベビーブーム世代と呼ばれたわれわれは、まもなく社会の「第一線」から撤退する。団塊世代がたどった日本社会の変遷と現在の到達点をみると、われわれは何をしてきたのかという、日暮れて慚愧の念に耐えない。

小学校の頃は、教室は六〇人近く詰め込まれ、今の三〇人学級の倍くらいいた。軍隊帰りの教師がビンタを食らわせるということも当たり前であった。中学では、良い教師と生徒たちから思われていた人たちが学テ反対、安保反対で、学校からいなくなったりした。高校時代にはベトナム戦争が憂鬱な膜のように心の中に張ったが、クラスの全体の雰囲気は大学受験路線であった。少数の左翼の若者にとっては勉強よりも間近な革命への挺身という命題があった。

「学生運動」については懐かしく振り返る人が多い。しかし一九六八年のパリ五月革命のように、神田カルチュラタンは労働者運動や社会運動には連結しなかった。「奴は敵だ、敵を殺せ」という傲岸なスローガンが「トロツキスト」やその支持者の「知識人」から発せられ、やがて自壊した。「革新時代」の高揚が一時あったものの七〇年の安保改定や沖縄返還あたりから、「左翼運動」の活気は薄れていった。

団塊世代は青春時代に社会的喧噪を楽しみ、その後社会人となってからは君臨する年上世代と後から登場する「新人類」の間で、独自の有効な社会政治方法を作り出せず、社会的イニシアチブをとることがなかった。

日本は五五年体制崩壊から一挙に新自由主義的体制に社会転換しつつある。今、コミュニケーション機能を重視しない新型政治の二番手である新世代の安倍政権が登場した。

しかし、団塊世代も真に社会的コミュニケーションを重視したのであろうか。

団塊世代はパンに挟まれたしなびたレタスのように、むなしく社会から退場し「高齢化社会」のお荷物扱いされようとしているのである。(石塚秀雄)

『葦牙 Journal』 No.66、『葦牙』の会 / 編集・牧梶郎、東京都新宿区百人町 2-18-6-401、発行・いりす、〒160-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 3-3-201 時期不明]

アソシエーション社会の危機……石塚秀雄、『葦牙 Journal』 No.72 (未掲載)

◇『葦牙』掲載の論文・エッセイ

歴史的とはなにか——五都博物館巡り●石塚秀雄、『葦牙』 No.39、2013 年 7 月号掲載。

存在しない「領土問題」から考える 石塚秀雄、『葦牙』 No.38、2012 年 7 月号掲載。

評論 リチャード・ライトとコミニズム 石塚秀雄『葦牙』 No.31、2005 年 7 月号掲載。

◇『葦牙 Journal』・現在（2013.09.0）の発行体制。107号までWEB上で見られます。

『葦牙』の会 / 編集・尾張はじめ

〒361-0044 埼玉県行田市門井町2-25-31 相田方.

Tel /Fax 048(553)4435

E-mail:ha-owari@tvgn.ne.jp

URL:<http://www1.odn.ne.jp/ashikabi>

発行・いりす、〒113-0033 東京都新宿区文京区本郷1-1-1-202.TEL:03-5684-3808/FAX:03-5684-3809、E-mail:irispubli@jewel.ocn.ne.jp

◇『葦牙』の発行

編集・『葦牙』の会（代表・山根 献）URL:www1.odn.ne.jp/ashikabi

〒113-0033 東京都文京区本郷1-1-1-202・「いりす」内 電話 03-3997-3511

郵便振替＊口座番号＊00120＊9＊187484 / 加入者名＊「葦牙」の会

発行・同時代社